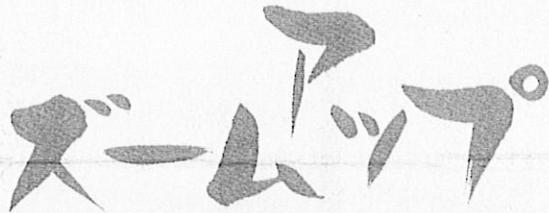


# 癒やす支える母子の明日

深紅に白、黄。鮮やかなバラの花びらが宙を舞う。

「思いを自由に表現してみて」。そう呼びかけながら、



毎週月曜日掲載

スタッフたちが、輪の中心に座る30歳代の女性に無数の花びらを浴びせた。

降り注ぐ花のすべてを受け止めるように、女性は両手を大きく広げた。その顔に自然と笑みが浮かぶ。「とても楽しくて。自分はこんな無邪気になれるんだ」と気づいたから」。声が弾んでいた。

大阪市東成区で社会福祉法人が運営する母子生活支援施設「東さくら園」。約50組の母子が入所する同園で、女性は3年前から2児と共に暮らしている。夫はギャンブルに明け暮れ、幼い我が子を虐待した。うつ病となつた女性は、子供と心中することも考えた末、この施設に入所した。

全国に約270か所ある母子生活支援施設。かつて「母子寮」と呼ばれた時代は、夫との死別で経済的に困窮した女性の入所が多かつた。近年は、夫の暴力（ドメスティック・バイオレンス＝DV）や児童虐待などが原因で駆け込むケースが後を絶たない。

施設には、まず女性の心に刻まれた傷を癒やすことが求められる。入所女性の半数がDV被害の経験者という東さくら園も一昨年から、精神的ダメージを緩和するワークショップに取り組む。△花のシャワー／＼で幸福感に浸つてもらうプログラムもその一つだ。

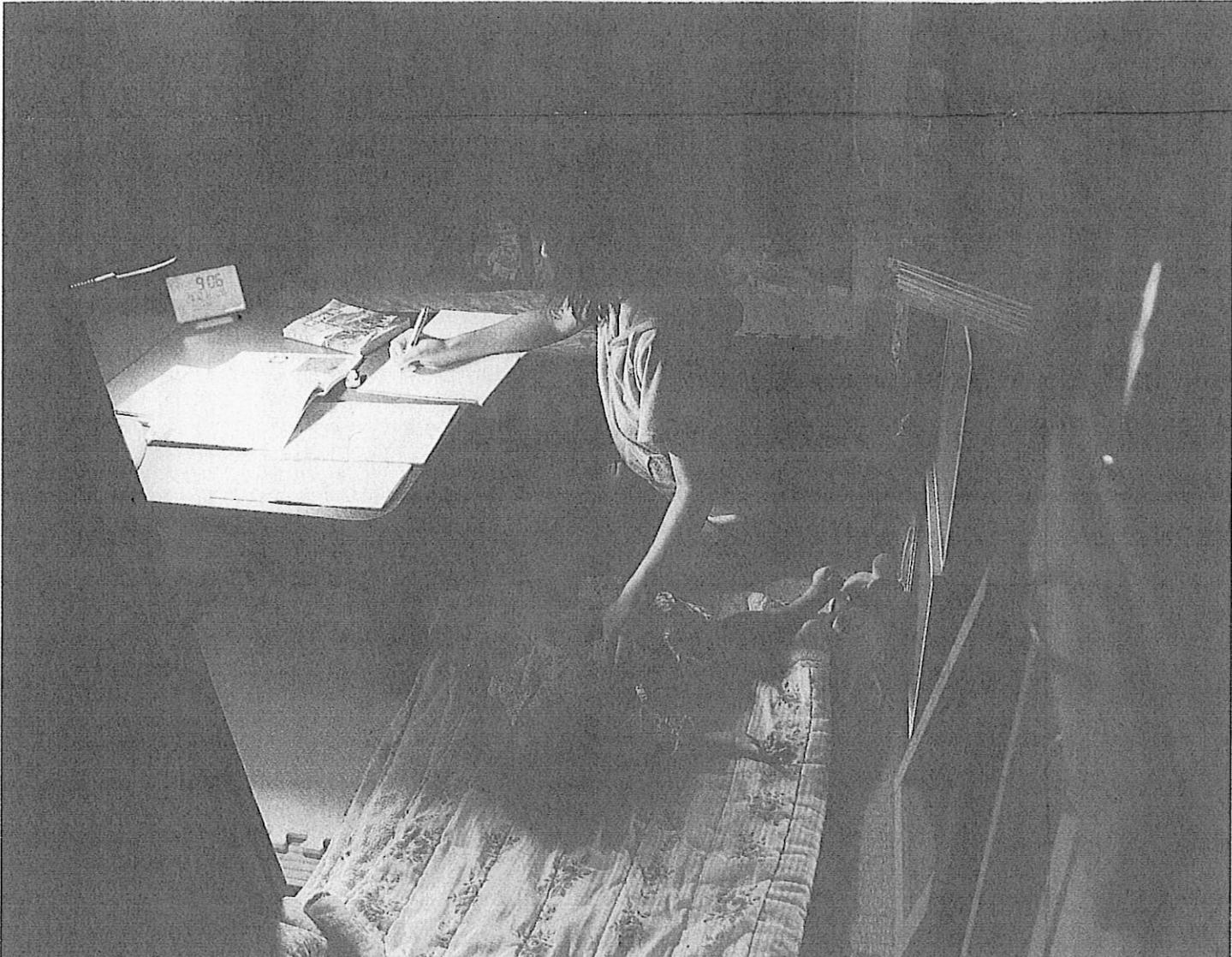
社会復帰のため、人とのコミュニケーションに関する訓練も導入している。母親同士で過去のつらい体験を語り合なびいて、これまで抑圧されてきた感情を表現する。そして、自身を見つめ直していく。

広瀬みどり施設長（53）は

「少しずつ日常生活に意欲を示し、学校に通つたり、就職したりする母親も出てきた」と話す。親が朗らかになると、子供たちも笑顔を取り戻す。「母親を支える。それは子供を守ることもある」と広瀬施設長は考える。

自立を果たした女性はまだ少ない。だが、母と子で歩む道へ、扉は確実に開かれている。

写真と文 上田尚紀



昨夏に経済的な理由で子どもを連れて来た22歳の母親。施設に入所してから次男を出産した



月に1度、行事の報告や問題点などを話し合う集会が開かれる（画像の一部を修整しています）

コミュニケーションを指導する講師は、様々な状況を示し「どう行動しますか」と母親たちに話しかけた

